コインは暗い
ほうへと倒れる

残念なことに、写真からはあやし
世の中そんなうまい話は

前よりも臨場感

また元通りにな
中に赤い靴

猫吉

一章

　地下鉄八事(やごと)駅の出口を上り始めると、湿り気を含んだ熱気が押し寄せてくるのを感じた。
　名古屋は、夏は蒸し暑く、冬は寒いことで知られている。
　私は大学に入学してから十五年もここに住んでいるのに、名古屋の夏だけはなじむことが出来ないでいる。
　階段を上りきると、飛沫が跳ね返ってこちらにかかるほど激しい雨が降っていた。車道からは、湿った土と水が混ざったような臭いが漂ってくる。
　会社を出るときに降り始めた七月の雨が、いつのまにか道路に叩きつけるような強いものになっていた。
　目の前にある八事の交差点は、興正寺方面が下り坂になっている。そちらに向かって濁った雨水が音を立てて排水溝へと流れ込んでいた。
　地下鉄の出口で傘を持っていない学生や若い女性が、不安そうに空を見上げている。私もつられて空を眺めた。手を触れただけで雨水がしたたり落ちそうな雲が広がっていた。しかたない、雨が小降りになるまで、雨宿りするしかないだろう。
　昨日まで雨が降らず、この地方に節水制限が出そうだというニュースをやっていたのに、皮肉なものだ。これだけの雨が降っても、肝心の貯水池には雨が降らなかったりするのだろう。
　雨の勢いが少し弱まり、交差点の信号も青になったので、私は覚悟を決めて走り出した。
　これから行く雀荘は交差点を渡ってすぐの所にある。

　雀荘に飛び込み、ハンカチを取り出して、濡れたところを拭いた。今日にかぎってスーツを着てきたのだ。それからネクタイを緩めて、やっとひと段落付いた。
　ドアから外の様子をうかがうと、雨は止んでいた。
　タイミングが悪い。もう少し雨宿りしていたら、濡れないですんだかもしれない。
　どうも最近はちぐはぐなことが多い。今日の麻雀は勝てそうもない、そんな嫌な予感がする。
　そこに、携帯電話が鳴った。
　私は携帯電話を切ると、舌打ちをした。
　――雀荘に呼び出しておいて、三十分も遅刻とはな。
　道路が渋滞しているから、遅れるという内容の電話だった。
　あの激しい雨が渋滞の原因になったのかもしれない。駅から出たときの雨の様子を思い出して、無理もないと思い直した。
　今日は金曜日。いつもなら定時に帰るのだが、来週提出する申請図書を印刷するのに手間取ってしまい、会社で残業していた。そんなところに麻雀の誘いの電話が掛かってきたのである。
　いつも誘われる人間が急な出張でいないこともあって、私が付き合うことになったというわけだった。

同僚の山下が取引先の現場事務所に仕事の説明を聞きに行って、雑談のついでに「じゃ、麻雀でもやりましょうか」とでも言ったのだろう。少し調子の良い所がある彼が、麻雀の牌を倒す仕草をしながら誘ったであろう、そんな様子を想像すると、断われなかったのだ。もっとも金曜日の夜だというのに、仕事の後に何も用事がないということもあったのだが。

取引先が相手と言っても、接待麻雀というわけではなく、もっと気楽なものだ。仕事といっても数十万円の出来高だし、現場で働く人間同士、ちょっとした付き合いで、仕事が円滑に進む――そんな意味合いのものだ。

たいした額ではないが、金もかけている。もちろんわざと負けたりはしない。

携帯電話をポケットにしまって、周りを見渡した。会社帰りらしいサラリーマンや、学業よりも真剣そうな表情の学生で、半分ほど雀卓が埋まっている。

狂躁のバブル経済がはじけてからずいぶんと経つというのに、ここはあまり関係がないようだ。

客の吸っているタバコの煙がゆらゆらと天井にのぼっていく。空気清浄機があるのだろうか、気になるほどタバコの匂いはしない。今時、気兼ねなくタバコを吸えるのは、雀荘くらいのものだろう。

降り止んだ雨の湿った匂いと、蒸されるような名古屋独特の暑さが室内に漂っている。

私はキチンとした身なりをして、役所の戸籍係みたいに几帳面な打牌をしている男達をしばらく見ていた。

この雀荘には、前に一度だけ、同僚に連れられて来たことがある。それもずいぶんと前の事だから、様子がつかめずに、初めての家に連れてこられた猫のように、何か落ち着かなかった。

店のスタッフに「友人達が少し遅れるから」と一言断って、入り口近くに置かれているソファーに腰掛けた。

横に置かれている、貧乏学生の部屋に似合いそうなオレンジ色に塗られた収納棚には、雑多な本が詰め込まれていた。

上段にはカバーが破れたり、ヤケたりしている、古本屋の均一本コーナーに置いてあるような麻雀マンガが、無秩序に放り込まれ、本の内容にふさわしい扱いを受けていた。中段には麻雀雑誌が、バックナンバー順に並べるという事を誰も思いつかなかった――というように詰め込まれている。

下段には「畑正憲の精密麻雀」などの戦術書、阿佐田哲也の「黄金の腕」「ドサ健ばくち地獄」松野杜夫の剣豪麻雀小説などが、何年も借り出されていない図書館の哲学書コーナーのように、ひっそりと並べられていた。

私は棚から一番新しい麻雀雑誌を取り出して、パラパラとめくってみた。ほとんどの頁がマンガで埋め尽くされていた。あらためて表紙を見たが『近代麻雀』と確かに書いてある。

昔読んだ『近代麻雀』は活字中心の麻雀雑誌だったのだが、何時しか麻雀マンガ雑誌になってしまったようだ。

しかたなしに、腰を屈めて棚の下段から「何を切る」というタイトルの文庫本を取り出して、読み始めた。

ドラの六萬を切り三色にして親リーチに向かうか、それとも安全牌の九萬を切ってダマテンにするか、そんな問題だった。
――男ならドラを叩きつけて勝負だろ。
こんな私の気持とは別に、冷静に考えれば、解答を見るまでもなく、遅くなっても、手広い対応が出来るような牌を切るのが正解なのだろう。
詰将棋のように精巧に作られて、唯一絶対の正解手順しかありえない、そんな問題もあるが、麻雀に絶対などという事はないのだ、なにしろ次にツモる牌がわからないのだから。
人生と同じで、正解などはありはしないのだ。私はそんなことをぼんやりと考えていた。

「兄ちゃん、待ち合わせかい？」
声のするほうに顔を向けると、何時の間にか隣に、初老の男が座っていた。
男は額が禿げ上がって、後頭部に最後の砦のような申し訳ばかりの白髪が生えていた。歯の欠け落ちた口を開けて、こちらに笑いかけている。
海辺で拾ったような汚いサンダルを履き、クリーム色の作業ズボンに黒いジャンパーをはおっていた。左手はポケットに入れて、右手に缶ビールを持っている。
近くの現場で一仕事終えた作業員のようにも見えたが、どこか遠くを見ているような眼と日に焼けていない顔が、そんな連中とは違うようにも思えた。
「ああ、仲間がちょっと遅れるというから、時間つぶしをしているんだ」
私が答えると、男はねばりつくような目つきで、こちらを値踏みしている。
またかと思った。学生時代から、この手の連中に目をつけられることが多い。それだったら、雀荘よりもどこかの公園か今池の深夜映画館といったハッテン場とよばれるところで相手を見つけたほうがいいだろうに。
「なあ、本に書いてあるような事は当てになるのかな？」
男は、私が持っている本に向けて、無精ひげの生えたアゴを上下させた。
私はしばらく考えてから、男に向かって言った。
「人生相談くらいには当たるんじゃないかな。たいていの人は正しい事を忠告されても、自分の望んでいるものと違ったら、それを受け入れられないだろうけどね」
男は乾いたような笑い声を出した。親しみのこもった表情からすると、どうやら私の答えが気に入ったらしい。
そんな男を見ていると、昔一緒に麻雀を打っていた知り合いを思い出した。
皮肉屋で、場数を踏んだ実戦的な理論と、ルールぎりぎりの汚い手口をいくつも隠し持っていて、いざとなったら、自分の勝負カンを頼りに荒っぽいことも出来る。そうして長い勝負が終わると必ず勝っている――そんなタイプの男だった。
隣の男もしたたかそうなタイプに見えるが、服装からすると何年も前に、すべての運を使い切ってしまったのだろう。
男は缶ビールをテーブルに置いて、右手だけで器用に開けると、二口ほど飲んだ。
缶ビールを再び置いて、人差し指と中指でタバコを吸う仕草をしながら自分の口元に持ってい

くと、私の方を悪戯っぽい目をしてみつめた。
　男の右手だけが、別の生き物のようにしなやかに、二本の指でＶ字を作っている。ピアニストや将棋指しのようなきれいで長い指が印象的だ。
　私は胸のポケットから携帯電話を出すと、空っぽになった胸ポケットを叩いて見せた。ついでに思いっきり笑って、タバコのヤニとは無縁な真っ白な歯を見せてやった。
　男は私の胸ポケットから、ズボンのポケットの方に視線を移動した。
　そしてお目当ての物がないと判断したのだろう。自分のジャンパーのポケットから、くたびれた箱を出すと、一本のタバコを取り出した。タバコの銘柄はハイライトだ。口にくわえると、百円ライターで火をつけ、肺の奥まで届きそうなほど吸い込む。
　男はうまそうにタバコの煙を吐き出した。人からタダでもらったタバコだったら、もっとうまかったに違いない。
　その表情は、男の貧相な顔を差し替えれば、タバコ会社のポスターに採用されそうだった。
「どうせ、暇なんだろ、面白い話を聞かせてやるよ」
　私の電話をどこかで聞いていたらしい。返事をするのが面倒だったので、黙って本の続きを読み始めた。
　男は私の意思に関係なく、独り言を言うように、話を始めた。

――ちょうど、二十年位前、バブルの始まる頃かな、俺なんかもう絶好調で、ビル・ゲイツとか言ったっけ、あのアメリカの大金持ち。あの時だったら、そいつと勝負したって負けなかっただろうな。

金が金を生むというのは、本当だな。最初は金がザクザクと入ってくるから、こんな面白い人生があるのだろうかと思ったさ。だけど、それが当たり前になると、話は違う。どんな美人だって、毎日顔を合わせていれば、飽きが来るだろ、それと同じさ。

あの頃は、何か変った事が起きないものかと、いつでも思ったものだ。誰かが、自分の寿命をチップに換えてやると言ったら、それを賭けてデカい勝負をしただろうな。

あれは、エアコンも効かないくらい蒸し暑い晩だった。

二日間雨が降り続いて、なんだか水槽の中にいるような気がするほどだった。ツモると牌から湿気が手に伝わってくるような気がしたよ。

俺と、連れのツネっていう、やたらタッパがあって、首にアザのある男、こいつはダンスがうまくてな、長いすらっとした脚で踊る様は見ものだった。

ジイサンと呼んでいた道楽者の男、あともう一人、佐田とかいうやけにオヤジくさい顔の男がいたっけ。そしてもう一人、問題の男が現れたのさ。

最初の頃は十人ほどいたメンバーも、一人抜け、二人抜け、脱落していって、最後の頃は五人ほどになっていた。そりゃ、お互いに食い合っているようなものだからな。負け続けて自然にいなくなるヤツもいれば、仕事の方でパンクして夜逃げ同然に消えていったヤツもいる。

そんなところに、佐田が新人を連れた来た。そいつを紹介しながら佐田は「ちょっとした知り合いですけどね」と秘密めいた笑いを浮かべたものさ。あいつがそんな表情をしたのは初めてだったんじゃないかな。なにしろ、笑うどころか怒るところも見たことがなかったからな。

その新人は、銀行員のようにキチンとした身なりをしていた。名前は「泥(でい)門(もん)」と一言名乗っただけだった。歳は二十代後半くらいだろうか、といっても髪の毛やシワ一つない肌からしてそんなものだろうと思っただけなんだけどな。だけど妙に落ち着いた雰囲気からすると、もっと歳をくっていたような気もする。いわゆる年齢不詳というやつさ。

一番気になったのは、ヤツが近くのスーパーにでも買い物に来たようにリラックスしている事さ。佐田からここがどういう所か教えてもらっているはずなのに、リンゴでも買うようにポンと札束を取り出したんだ。

ヤツは何を言うわけでもなく、値踏みするような眼で周りを見回していた。俺たちがブタや牛で、ヤツが仲買人じゃないかと思うほどだった。

その時には、博打相手の懐具合や性格を探っているのだろうぐらいにしか思わなかったんだが、今からして思うと、もっと別のものを物色していたんだな。今でもあの目付きを思い出すよ。

最初は遊びみたいな金で麻雀をやっていたのだが、ヤツが入ってからおかしな雰囲気になっていった。なにしろヤツは牌が全部見えているんじゃないかという具合に上がりつづけるのさ。

当時出始めたばかりの全自動卓を使っていたから、積込みだとか、ガン牌なんてインチキが出来るはずもないしな。
ヤツは、コンビニのレジでも打つように、簡単に上がるんだ。俺がヤツの後ろで見ていた時でも、一枚だけ浮いている飜牌が何時の間にか暗刻になる。両面を嫌ってカンチャンで待つとすぐに聴牌するという具合さ。ポンやチーして邪魔しても、結果的にヤツの思い通りになっている。
ヤツには全ての牌が見えているとしか考えられない。だれもがそんなことを考えていたんだが、意地でもそれを認めたくなかった。そんなわけで、俺たちはヤツに手もなく捻られ続けたというわけだった。
そんな事が何回かあって、俺たちは「泥門」というのは人間じゃない、悪魔が姿を変えて人間界に来たんじゃないかと噂したものさ。
相手が悪魔みたいなヤツでは、俺たちでは歯が立たないんだから、やめればすむ話なんだが、俺たちはどうしたわけか、やめられなかったんだな。
悪魔に魅入られたというのか、ほら、誰でも経験したことがあるだろ。例えば、高いところに登って、こんなところから落ちたらどうしようと思っているのに、どうしても下を覗いてしまう。火遊びは絶対にダメだよと親に言われても、一人きりになると、マッチ箱のほうに視線がいき、部屋で紙を燃やしたらどうなるだろうと考えてみたり、扇風機が回っていると、防護カバーの隙間から指を入れてみたくなる。
俺たちはちょうどそんな状態だったのさ。今から考えれば、破滅願望があったのかもしれないな。博打なんてものは、破滅と隣り合わせだから面白いんで、ただ金儲けするんだったらリスクの少ない投資でもしていればいいんだからな。
しばらくすると、元からいたメンバーは俺とツネだけしか残っていなかった。俺とツネは、二人ともいずれは破滅するんじゃないかとはうすうす気が付いていた。だけど、最後に自分たちがどうなるか、それだけは見届けたいと思っていたんだ。破滅の渕を覗き込んでしまって、もう帰れない、そんな状態だった。
俺とツネは、このまま負けつづけるのはシャクだから、最後の大博打を打つことにした。というのも、俺が面白いネタを仕入れたからだ。

　男は勿体をつけるように、話を止めて、ビールを喉を鳴らして飲んでいる。
　間の取り方が俺の反応を試しているようにも思えた。
　男の声は貧相な外見に似合わない、低い深みのあるものだった。私は本を閉じて、膝の上に置くと、男の足元をみつめた。
　男は私の視線を感じたのか、視線の先にある、自分のみすぼらしいサンダルを見て、自嘲の笑いをもらした。
　缶ビールをテーブルに置くと、私のほうに顔を向けた。
「兄ちゃん、十円玉を持っていたら貸してくれよ」
　男はそう言うと、私の前に女のように手入れの行き届いた手を差し出した。
　私はサイフから十円玉を三枚取り出して、男の手のひらに落とし込んだ。男は三枚の中で一番古ぼけたコインを取り除くと、残りを私に返してきた。
　男は私から取り上げたコインを、テーブルの上に置こうとしたが、コインはテーブルを転がると下に落ちて、チリンと乾いた音を立てた。男はあわてたようにテーブルの下に見を屈めると、十円玉を探っている。
　私は時計を見た。何十分も経ったような気がしたのだが、数分しか過ぎていなかった。男と会ってから、現実感が希薄になっていく。私は不思議の国に紛れ込んだアリスのような気持ちだった。
　男は探し出した十円玉を手にして、チェシャ猫のような笑いを浮かべると、「十円玉の裏・表が出る確率は二分の一だろ」と言う。
　私がうなずくのを見てから、男は「じゃ、裏が四回続けて出る確率はどのくらいだ？」と聞いてくる。
「それは、二の四乗だから、十六分の一かな」
　私の返事に、男は何も言わずに、十円コインの上を指で押えると、別の指で強くはじいた。コインは勢い良くまわったあとに、徐々にゆっくりとした回転になり、やがて倒れた。
　上になった方はアラビア数字で「１０」と書いてある。コインは「日本国」と書いてある方が表なので、裏が出たという事だ。
　男は「二回目」と言いながら、またコインを指で弾いた。出たのはまた裏側だ。
「三回目」男は耳障りな節回しで言うと、コインを弾いた。クルクルとまわる姿を見ていると、コインが踊っているように見えてくる。
　運命を司る女神の踊りだ。背筋をピンと伸ばして、何回も回転する。彼女に自分の運命を賭けた男たちの熱い視線が注がれる。やがて彼女は力なく倒れこみ、男たちの溜息と喚声が交差する。
　三度目の裏側を私に確認させるように、男は私の目の前に差し出すと、ニヤリと笑いながら、コインを手の中で躍らせて弄んでいる。

「さあ、四回目だが、あんただったら、裏・表どっちに賭ける？」
　男の問いかけに、私は思わず「表」と言いそうになったが、少し考えてから、こう言った。
「数学的に言えば、裏や表が出る確率は二分の一だな、前の三回が裏だからといって、今度こそ表が出るだろうと考える人は多いけど、出る確率はどちらも同じだよ。コインが前の結果を覚えていれば、別だけど、前が表だったとか裏だったとか覚えていて、今度は裏だ表だというのは、人間の勝手な思い込みなんだ」
「あんた、数学の教師かい、理屈は正しいけど、そんな事じゃ、人生楽しめないぜ」
　男は笑いながら言った。堅物の人間を諭す遊び人のような言い草だった。
「ところで、今度も裏が出ることに賭けるから、あんたは表が出るほうに賭けてみないか？」
　と言う男に、私は胸の前で両手を交差させて×を作った。男のいう事が芝居じみていたからだ、あまりにも胡散臭い。これに引っかかるやつはあまりいないだろう。
　男は私の仕草に失望したように、顔をそむけると、小さく舌打ちをした。そして気を取り直すように、コインを弾いた。
　十円玉は、裏側を上にして止まった。四回連続して裏が出たことになる。私はさほど驚かなかった。心のどこかで、この結果が出ることを予想していたような、そんな気持ちがあったからだ。
「あんた、冷静だな。たいていの人間は、びっくりしたり、賭けに乗ってくるんだが……あんたを気に入ったから、誰にも話さなかった本当の話をしてやるよ」
　男は、こう言って、コインを私のほうにトスした。両手でそれをキャッチする。十円玉をサイフに入れようとした時だ、「その十円玉をよく見てみろよ」という声が聞こえた。
　渡された十円玉を見てみた。縁のほうが妙な気がして、灯りにかざしてみる。
　十円玉の縁を指でなぞるように触わると、どうして違和感を覚えたのか、その理由がわかった。ふちの円周が削られて、内側から外側のほうに傾斜がついているのだ。
　傾斜のつけられているのは裏側だった。「そういうことか」私は思わず唸った。
　男はかるくうなずくと、共犯者に語りかけるような親しみのこもった声で言った。
「さっき言った、面白いネタというのはそれさ。簡単なトリックだ、傾斜をつけたほうが上になることに決まっているんだ。俺がギャンブルのトリックを集めた本から見つけてきたのさ。なんでもイカサマ師は表と裏の二種類をいつも持っていて、その時に応じて使い分けるらしいんだ。コインみたいなありふれたものは、あんがい誰も見ているようで見ていないものなんだな。いわゆる盲点ってことさ、俺があんたからもらった十円玉を落としたふりをして、スリ替えても分からなかっただろ？」
　酔っ払っていて、十円玉を落としたのだろうと思っていたのだが、演技だったのだ。見かけによらず、抜け目のない男だ。
　私はそんな事を思うと、この男と一緒に舞台で演技をしているような、そんな気がしてきた。
「それで、俺は……」
　男は先ほどの続きをするために、話をし始めたその時、私の前に影が落ちて、誰かが立っているのを感じた。

「シロちゃん、ずいぶんと待たせたね……」
　山下の声がしたので、顔を上げると、三人の男が立っている。
　その中に取引先の主任を発見した私は、思わず立ち上がって、頭を下げた。
「お待ちしていましたよ、じゃさっそく始めましょうか」
　私はとっておきの愛想笑いを浮かべたつもりだが、相手がそう思ってくれたかはわからない。
「凄い雨だったよ、こんなことは久しぶりだ」と、主任は卓の方に歩きながら、言った。声の調子からして、機嫌は悪くなさそうだ。
　私は後を振り向いて男の方を見た。
　男は、私と目が合うとニヤリと笑った。サラリーマンに戻った私を嘲るような笑い方だった。
　私達は遅くなった時間を取り戻そうというように、せかせかと麻雀の準備を始めた。起(ちー)家(ちや)は私だった。
「起家で勝ったことがないからなあ……」
　私のぼやきに、卓のまわりから苦笑が起きて「どこの場所でも、勝ったことないんじゃないの」と突っ込みが入る。
「そうかもしれないな」と私は言ってから、頭をかいた。
　私がリーチを掛けると、三巡目に安い方をつもった。裏ドラは乗らない。牌を雀卓に落とし込み、せり上がってくるのを待っている間に、あの男の姿を探したが、見つからなかった。
　きっと帰ったのだろう。麻雀に熱中しているうちに男のことは脳裏から消えていた。
　先ほどの嫌な予感とは違い、麻雀の調子は良かった。
　私はなんでも本から入る方だ。将棋と麻雀は入門書を何度となく読んで覚えた。人からルールを聞いたり、ゲームを見ていて覚える人間のほうが多いのだろうが、私はルールを頭にたたき込んで、全体像を把握しないとすまないタイプなのである。
　だから、大勝ちはしないが、大負けもしない、トータルするといつも少し浮いている――皆からは堅い麻雀を打つ男と思われている。
　親で満貫をあがったのがきいて、最初の半荘はトップだった。麻雀というのはいかにトップを取るかというゲームだから、うれしかった。次の半荘を大負けでもしないかぎり、いつもどおりに少し浮いて帰ることが出来る。そう思うと心に余裕が出て、タバコの臭いも騒音も気にならない。頭の中が澄み渡って、いまならどんなことだって出来そうに思える。こんな気分になったのは久しぶりだ。
　次の半荘はラス親だった。気力が充実しているので、積もる牌に力がこもる。
　私は本を読むと同時に、麻雀牌を買い込んで練習したので、盲牌が出来る。
　盲牌というのは、牌に刻み込まれた部分を親指でこすって、どの牌か見ないでも識別するというテクニックである。これだと山から牌を持って来ると同時に牌を見ることなく牌の種類がわかるというわけだ。慣れれば誰にでも簡単に出来る技だ。
　ツモは順調で、中盤には平和・断ヤオ・ドラーが仕上がった。すぐにリーチをかけた。待ちは「二・五ピン」。これが簡単に上がれれば、このあともすんなりと行くだろう。そんな今後を占うリーチだった。

すぐに対面が安全パイを切って、追いかけリーチを掛けてきた。次のツモは「西」だった。捨てると西家がポンをした。牌を盲牌しすると、ザラゥとした感触がある。「七ピン」だとわかったときに嫌な感じがした。
私の捨て牌に対面は喜色を浮かべて、勢いよく牌を倒した。
リーチ・三色・ドラーで満貫だった。
西家の鳴きが入らなければ、下家が振るか、手の中に入れる牌だった。どうやら流れは悪い方に向かっているらしい。
そのあとも、ちぐはぐな手が続いた。配牌は良いのに、ツモが悪くて、手が全然進まない。嫌ったメンツのほうをツモる。不要牌を暗刻で持ってくる。
いわゆる半ツキというやつだ。最初から手が悪ければ、すぐに降りるのだが、なまじっか手が良いように思えるから、あきらめきれない、生殺しのような状態が続いた。
過去の経験からいって、こんなときが一番危険なのだ。
いらつく気持ちを抑えて、相手の捨て牌や表情を慎重に見定めながら進めた。
その後は振り込むことはなかったが、ツモられたぶん沈んで、満点棒だけが寂しく点棒入れに入っているだけだ。
そんな状態でオーラスをむかえた。
ラス親だから、ここで誰かに上がられたらラスが確定するだろう。
安い手でも良いから連荘することが必要だった。私は頬を軽く叩いて気合いを入れた。
その甲斐があってか、二千オールをツモった。流れがまたこちらに向いてきたような気がする。
配牌を見て、ため息をつきそうになったが、それを抑えて顔を引き締めた。
酷い手だった。さきほど上がったのはなんだったのだろうというほどだ。字牌がバラバラに五枚、数牌も三種類が均等に見事なまでに一メンツも揃っていない。
普通なら最初からオリ打ちするところだ。しかしオーラスの親なのだ。そんな消極的な打ち方をするわけにもいかないだろう。
どうしようかと思ったときに閃いた。ここはひとつハッタリでいこう。国士無双狙いと思わせて、皆が降りてくれればもうけものである。
私は、数牌の脂っこいところから切り出した。
卓の上にはおかしな気配が漂っていた。皆の捨て牌がぎこちない。
全員の手が重いというのだろうか、捨て牌にダブリが目立つ。私には端牌がなだれ込んでくるのだから、誰かに中張牌がごっそり入っているはずなのに、手が進んでいるようには見えないのである。
いつしか私の手牌にはヤオ九牌が十一枚揃っていた。ないのは「九萬」と「北」だけだ。不思議なことに頭が出来ていない。ひょっとしたら国士無双十三面待ちダブル役萬ということも考えられる。
ハッタリのつもりだったのに、ツモる牌に力がこもり始めた。
場を見渡すと、捨て牌は中張牌が多く。完全に四枚切れた牌はない。

　そうして「九萬」が入り、一向聴になった。頭が出来れば「北」待ち「北」を持ってくれば、なんと十三面待ちになる。
　盲牌すると親指にざらつく感触があった。「九ピン」だった。
　国士無双の聴牌だ。「二ピン」を捨てるときに、指がかすかにふるえた。
　肩に力が入り、首がこわばっているのを感じる。
　俗に聴牌タバコという言葉があるが、私がタバコを吸っていたら、ここで一服したことだろう。
　一巡すると、下家がリーチを掛けてきた。捨て牌はあきらかに索子の混一色狙いだ。待ちが多いから、ツモにかけているのか、それとも裏ドラ目当てか。
　対面に座る元請けの主任は、なんのためらいもなく危険牌の索子をツモ切りしてきた。
　やけに突っ張っているなと思った。彼はいつもは慎重な麻雀を打つはずなのだが。それに唇をきつく結んで表情が硬い。
　うなじに静電気が通ったというように小さな痛みが走った。なにかがおかしい。
　上家が考えている間に、対面の捨て牌を見ると、ヤオ九牌が一枚も切れていない。もしかすると私と同じ国士無双の聴牌なのか。
　オリたらしい上家は、下家の安全牌である「三萬」を捨てた。
　ツモってきた牌のざらつく感触に、私は顔をしかめた。
　鳥が描かれた「一索」だった。リーチ者には通っていない危険牌だ。それにもし対面が国士無双の聴牌だったとしたら、そちらにも危ない。
　先ほどまでの「九ピン」を切って「一索」と頭を切り換えれば、まだ大丈夫、望みはある。
　自分の手を見ると、当たり前だが、こちらも国士無双なのだ、ヤオ九牌しかない。そんなことはないだろうが、相手が十三面待ちだったら、どの牌を切っても当たることになる。
　そんなバカなと思いながら「九ピン」を河に捨てた。
「ちょっと待ってくれ」
　対面があわてたように言った。生唾を飲み込むように喉を鳴らすと、ゆっくりと手牌を倒した。
「それ、ロン。国士無双の十三面待ちだよ。たしかダブル役萬だよな」
　両脇から歓声が上がった。
　私は全ての点棒を卓の上に出してから、点数を申告した。
「ダブル役萬なんて上がったのは初めてだよ。それも白鳥君から出るとはな。最高にうれしいよ」
　そう言った主任は、崩すのが惜しいというように自分の手牌を見つめている。
「それがね。信じられないかも知れませんが、私も国士を聴牌していたんです。だから、自分の手牌のどれを切っても当たっていたんですよね。まったくどれだけついていないのやら」
　自嘲めいた口調で、私は言ってから、手牌を開いた。こんなことは伏せて置いても良いのだが、主任をもっと喜ばせてやろうという気持ちになっていたからだ。どうせ半荘二回の約束だったから、これでお開きになる。

「本当だ。『北』待ちか。こんな麻雀劇画みたいなことが実際に起きるんだね」
　主任は得意顔で私の手牌をのぞき込んだ。
　ダブル役萬を上がってうれしいところに、さらに劇的な展開があったことを知ったのだ。これが接待だったら、絶大な効果をあげたことだろう。
「主任、ついているところで、祝杯をあげにいきますか」
　同僚の山下がそう言って、おちょこで酒を飲むしぐさをした。

　二次会を終えての帰り道、私はポケットに例の十円玉があることに気がついた。
　十円玉を握ると、あの男の話が蘇ってくる。どうせヨタ話だったんだろうなと思った。

私は地下鉄が好きだ。
地下に降りていく時の、別世界に入り込むような気持ち、階段を上り地上に出たときの、日常世界に戻ったような開放感。
昔はよく、休日に一日券を買って、これという目的もなく朝から晩まで地下鉄に乗るということをしたものだ。
私は地下鉄覚王山(かくおうざん)の駅から出ると、坂を下って椙山(すぎやま)女学園のほうに向かった。
名古屋というと車の為の街みたいなイメージがあるが、意外と公共交通機関が整備されていて、街中だったら車を使うよりも便利なことも多い。少なくとも駐車する場所がない場合はこちらの方が都合がよい。駐車料金や駐める場所を探す時間もバカにならない。
これから行く現場事務所は小さなビルの二階にある。その近くで、ベージュの作業服をはおった。
たった一枚服を余分に着ただけで、汗が噴き出してくる。
七月の強い日差しがアスファルト道路を焼いて、私は熱した鉄板の上に置かれた卵の気分を味わった。
昼前に伺いますと、連絡を入れて来たのだが、現場事務所には誰もいなかった。
何年も前からつきあいのある、気心の知れた担当者の事務所だ、遠慮することなく、勝手に中に入って待つことにした。
現場事務所というのはどこでも独特の雰囲気がある。
泥で汚れた長靴と呼ばれる安全靴や大小様々な工事用黒板、壁には黄ばんだ工事場所の見取り図が貼ってある。
机の上には図面やファイルが乱雑に置かれ、来客用のパイプ椅子にはマンガ雑誌が積み上げられていた。
クーラーは切ってあって、部屋の中は蒸し暑かった。私は窓を開けた。
窓から目の前に広がる新しく作られた道路を眺める。
名古屋市の御器所(ごきそ)から八事日赤へとつながる道路だ。
何十年も工事が中断されていたものが二年ほど前から動き出して、最近できあがったばかりだ。
仕事先の工事会社が、道路に沿って作られた共同溝に管路を設置する工事を請け負っていた。
工事というのは、実際の作業よりも役所や元請けとの折衝、様々な書類や図面作成という細々としたものに手間暇がかかるものだ。
外に出て体を動かして現場で働くのが好きな男ほど、書類整理や図面を作ったりすることが苦手だ。中にはどちらもダメだという人間さえいる。
私の会社はそんな彼らのために、施工図や完工図を作成するのを仕事としている。工事現場の

隙間を埋めるようなたわいない仕事だ。
　私は窓から離れて、壁に貼られた工程表に見入った。担当者の依頼で、私がパソコンのドローソフトで作った一メートルほどの横長の表は、マジックで書き殴ったようなメモや電話番号などがびっしりと書かれて、見る影もない。
　階段の方から、安全靴特有の重い足音が聞こえてくる。入口に近付くにつれて足音に笑い声が混ざり、作業を終えた安堵感が伝わってくる。
　ドアが開き、二人の男が手に持っていたヘルメットを入り口の壁にかける。
　私は挨拶をするために、二人に向かって頭を下げた。
「シロちゃん。来てたのか、それにしても暑いな、おいクーラーを入れろよ」
　ここの責任者である村上さんはそう言うと、下川の方に向き直り、アゴをクーラーの方に向けて動かした。
　下川はクーラーの設定を強にしたのだろう、轟音と共に机の上の書類がパタパタと音を立てるほどの冷気が流れ出した。
　私は窓に駆け寄って開け放されていた窓を閉めた。
　二人はクーラーの下で、タオルを使って汗をぬぐっている。
　村上さんは四十二歳で、工事会社の主任だ。鹿児島出身でがっしりとした体格をしている。最近は運動不足なのか、腹のあたりに贅肉がつき始めている。
　同僚から聞いた話では、剣道六段で会社の剣道部では主将を務めているらしい。男らしい一本筋の通った性格なのだが、そのかわりうまく立ち回る事が苦手で、勤続年数からすれば、副長クラスなのに、いまだに主任から上に行けないでいる。
　最近は出世することは諦めて、気楽に生きていくことにしたらしい、多分腹が出てきたのもそのせいだろう。
　下川は「下(しも)ちゃん」と周りから呼ばれている。
　会社に入ってまだ四年ほどだ。元請けの会社の中では若い部類に入る。去年までは電柱に登って配電工事をしていたのに、急に土木にまわされた、というかわいそうな男だ。
「昨日まで電柱に登っていた男が、今日から穴を掘れですよ――いったいどうなっているんでしょうかね」
　というのが彼の口癖だった。最近は愚痴を言ったところで何も変わらないという事に気がついたのか、それとも出世コースから外れた上司の姿から何かを学んだのか、真面目に土木の勉強をしているようだ。
　村上さんは、やっと暑さが退いたのか、自分の席に戻ると、私の方に向かって「昼はまだなんだろ、おごってやるから一緒に食べに行こうぜ」と言った。
　これまで、何回も食事をおごってもらっている。それに支払い伝票を彼に書いてもらう時期でもある。
私は「たまには、私がおごりますよ」と言った。
「おまえらみたいな貧乏会社におごってもらうほど、俺たちはおちぶれていないぞ」
　村上さんは笑いながら言った。

たしかに私の会社は貧乏だ。出来高もたいしたことはない。それにあまり強気に私が主張して、彼の機嫌をそこねるわけにもいかない。
ふと頭の中にある考えが浮かんだ。
「じゃ、村上さん、こうしましょうよ。賭けをして負けた方がおごるということでどうですか」
「おっ、面白いな、よしそれでいこう」
私はポケットの財布から例の十円玉を出した。
「この十円玉をまわして裏がでたら村上さんの勝ちということで、私がおごり、表がでたら私の勝ちで村上さんにおごってもらうということでいいですね」
私はそう言ってから、村上さんの顔を見た。彼は黙って頷いた。日に焼けた顔が好奇心に輝いている。現場で働く人間というのは、こうしたたわいのない賭け事が好きだ。
下ちゃんも身を乗り出して、興味深そうに私の手の中にある十円玉を見つめている。
「じゃ、行きますよ、日本国と書いてある方が表ですからね」
私は村上さんの机の上に十円玉を置くと、左手で上を押さえながら、右手の指で弾いて勢いよく回した。
二人は回転しながら楕円の軌道を描く十円玉を、真剣な目付で見ている。私は十円玉よりも二人の表情を眺めていた。どちらが出るか、私にはわかっている。わかりきった結果よりも、こんな事で夢中になっている人間を観察したほうが面白い。
コインはやがて、机に体を横たえるように裏側を表にして動きを止めた。
「裏だから、村上さんの勝ちですね」
私はそう言ってから二人が確認出来るように一呼吸おいた。それからコインを取り上げ、ひっくり返して『日本国』と書かれている方を見せてから、ポケットにコインを入れた。
「なんか、今日はついているかもしれんな」
そう言う村上さんに、下ちゃんが「こういう時に競馬でもやれば勝てるかもしれませんよ」と合いの手を入れる。
苦笑いする村上さんを見ながら、また競馬で負けたのだろうかと私は思った。
「串カツの店にでも行きましょうか、歩いていけば、ちょうど良い時間ですよ」
私の提案に二人も同意した。
事務所を出てから五分も歩くと、その店はあった。
半年ほど前に出来た店で、大通りに面しているが、駐車するスペースが二台ほどしかなく、これでは近所の人間くらいしか食べにこられない。
名古屋ではある程度の駐車場がないと、なかなか客は集まらないのである。
安くてうまくてボリュームがある、という良い店なのだが、行列ができるほど混んでいるわけではない。そういう意味では穴場といえる店だ。
店に入ったのが十二時半過ぎ、ちょうどサラリーマンが食事を終えてそろそろ会社に戻ろうかという時間だ。
店の中はちょうどテーブルが一つ空いていた。席に座り、エビフライ定食を三人分頼む。何回か来ていろいろ食べたが、このエビフライ定食が一番うまい。

「最近、競馬の方はどうなんですか？」
　私は定食が来るまでの話のつなぎに、村上さんに話しかけた。
「それが、さっぱりなんだ。やっぱり最初があまりに良すぎたんだな」
　村上さんは力のない口調で言った。
　彼は半年前に知り合いから競馬を誘われて、やってみたところいわゆるビギナーズラックというやつで、何回か穴を当てて、軽自動車が買えるほど儲かったらしい。
　当時、人に会う度に「競馬は面白いぜ、あんな簡単に金が儲かるのに、どうして今までやらなかったんだろうな」と競馬の楽しさを説く伝道師のようになっていた。
　ギャンブルにはまりこむ人間は、最初に、勝つことだけ覚えたために負けはじめてもやめられない、というケースが多いようだ。
　濡れ手で粟の、ギャンブルの神様が降りてきたような、そんな快感を一度経験したら、なかなか抜け出せるものではない。
　村上さんは絶頂期に、俺はギャンブルの神様に選ばれた天才なのかもしれない――と感じたらしい。神様の寵愛を失った今でも、そう思っているかはわからないのだが。
　皮肉な事を言えば、神様ではなくて悪魔に魅入られた凡才なのかもしれないのである。
　私はあわてて話題を同僚の失敗話に切り替えた。知っている人間で同席していないヤツのうわさ話ほど面白い物はない。それがドジな話ならなおさらだ。
　食事が運ばれてくる頃には、笑い声がでるほど村上さんの機嫌は直っていた。
　レジで会計を済ませる。三人で食事をしても二千円ちょっとだ。領収書をもらうときに、宛名を無記名にしてもらう。
　事務所に戻る帰り道、村上さんに領収書をこっそりと渡した。
「おっ、いいのか」と言うのを制して「これくらい、気にしないでください」と私は言った。
　無記名の欄に自分の会社名を書けば、交際費で落ちて自分の手元に現金が戻ってくる。ささやかな役得というやつだ。
　要領の良い人間は、行きつけの喫茶店から何も書いていない領収書を何枚も、もらうという手口を使う。
　たまに他の現場事務所に行くと、白紙の領収書に金額と宛名を書かされることがある。経理に自分の筆跡を知られているので、赤の他人に書かせるわけだ。
　字体を変えろ、とかきれいな数字の書き方じゃなくて、もっと喫茶店の人間が書いたように見えるようにしろ――とうるさく言われながら書いたことがある。
　せこいやり方だが、数百万・数千万の裏金を作る役所に比べたら、かわいいものだ。
　事務所に戻り、完工図書の打ち合わせをしてから、外に出た。
　昼前の照りつける日差しはなく、どんよりとした曇り空になっていた。気温が下がり、少しは涼しくなるはずなのだが、前よりも蒸し暑く感じるだけだ。
　名古屋の夏は暑いといわれるのは、この蒸し暑さにある。普通は木陰にでも入れば涼しくなるはずなのだが、湿気が多いのかどこにいてもかわらないのである。
　上着を脱ぎ、ハンカチを出して首筋の汗をふく。

来たときと同じ道を帰る。違うのは来たときには下り坂だったのが、帰りには上り坂になったことだ。
坂道はアスファルトではなくコンクリートで舗装されている。左手には私のような貧乏人は似合いそうにない、高級マーケットが建っていて、身なりの良いご婦人が出入りしているのが見える。
坂を登りきると広い道路に出る。すぐ左に地下鉄の通路がある。
地下鉄の切符を買うために財布を取り出しながら、先ほど使った例のコインを思い出した。
ホームで待ちながら、あの男にコインを返そうと思った。
先ほどのちょっとした賭け事でさえ、結果がわかっているということで、私はおおげさに言えば運命を操る、支配するような快感を感じていた。
このままコインを持っていれば、間違いなくまた使ってしまうだろう。遊びで使っているうちはまだしも、こんな事で金儲けに利用するようになったら――そんな怯えにも似た感情がわき上がってくる。
私はポケットからコインを取り出すと、カバンの中へと移した。
十円玉に少しの細工をしただけで、魔法のような効果が出るのだから不思議な物だ。
轟音を立てて列車がやってくるのが見えた。車両は交通局の経済状態が心配になるほど空いていた。

　今日は金曜日、私は八事に来ていた。
　あの男にコインを返すために雀荘に向かった。
　同じ金曜日だったら、男が来ているような気がしたからだ。いなければいないで、コインは側溝にでも放り投げて処分するつもりだ。とにかく何らかの形でカタを付けてしまいたかった。
　時が経つほど、私の心の中でコインは重荷になっていく。
　仕事が早めに片付いたので、時間は六時少し前だ。外はまだ明るい。
　雀荘をのぞいて、いないようだったら、地下鉄「いりなか」駅の近くにある古本屋を冷やかしてから、もう一度来ようと思っていた。
　店のドアを少し開けて、のぞき込む。男は見あたらない。
　ドアを閉めて、八事の交差点に戻ろうと歩き始めた。ふと、人の気配を感じた。店と隣のコンビニの間の路地に誰かがいるようだった。
　路地の突き当たりには擁壁があり、そこを超えると中京大学の構内だ。
　擁壁に立てかけるように雑多な物が置かれていて、そこに一人の男が背中を向けて立っている。
　私は足を止めた。男の着ている黒いジャンパーに見覚えがあったからだ。
　男は振り返ると、こちらに向かって歩いてきた。そして私と眼が合うと何かを思い出すような仕草をしてから、ニヤッと笑った。
「あの時の、兄ちゃんじゃないか」
　私は男の言葉に頷くと、ポケットから例のコインを取り出した。
「これは返すよ……」
　男は右手を出すと私からコインを受け取って、指の先でコインの縁を確かめるように触った。それから顔を上げると、何か珍しい生き物を見るような目付きで私を眺めた。
「ちょっと、つきあえよ」
　男はぶっきらぼうにそう言うと、コインをポケットに無造作にしまい、歩き出した。
　私も黙って男の後について歩く。この前は座っていたのでわからなかったのだが、男は百七十五センチある私よりも数センチ背が低い。
　夏だというのに、薄手の長袖のジャンパーを着て、いつ洗濯したのか分からないジーンズ、足には靴屋の店頭に山積みされていそうなスニーカーというスタイルだ。前よりも多少はましな格好に見える。
　男は早足で、八事交差点を渡ると杁中(いりなか)の方に向かう。
「どこに行くんだ？」
　私の問いに男は首を後ろに回すと「この間の話がまだ途中だったろ、どうせ暇なんだろうから、最後まで聞いてくれよ」と言った。
　杁中に続く道は下り坂になっている。しばらく来ない間に、道の両側にはビルが建ち並んで

いた。
　コンビニの前で男は足を止めると「何か飲み物でも買っていこうぜ」と言いながら、店の中に入っていく。
　男は慣れた様子で入り口に置いてあるカゴを手に取ると、奥にある飲料水のコーナーに向かった。私は彼が何を買うのか興味を引かれて後をついて行った。
　男は迷うことなく缶ビールを二缶手に取り、カゴに入れた。私は一番安い発泡酒を一缶手にした。
　男はつまみでも買うつもりなのか、菓子類が並べられたコーナーの床にカゴを置くと、ポケットに両手を突っ込んで物色している。
　私は時間が掛かりそうな男に付き合うつもりはないので、そのままレジに向かった。
　レジには若い男が一人並んで、雑誌と夕食なのだろうか弁当を買っている。レジ係はバイトなのだろう学生のような若い女性が入っている。
　私がレジに発泡酒を置くと、後から「ねえちゃん、これも一緒に会計して」という大きな声と同時に、カゴを置く重そうな音がした。カゴの中には缶ビールの他にポテトチップスの袋と棒状のサラミが一本入っている。
　後を振り返ると、男がいつの間にか立っている。私と眼が合うと、横に視線を逸らした。
　私は舌打ちをすると、財布を取り出した。男はつまみを物色するふりをしながら、私がレジに行くタイミングを計っていたのだろう。
　若い女性がレジを打ち終わろうとした時に、また後から「ねえちゃん、悪いけどハイライト二箱追加してちょ」という声がした。
　女性はタバコのケースに近付いた。
「おねえさん、タバコは一箱でいいから……」
　私は不機嫌な声で言ってから指を一本立てた。
　彼女は当惑顔で私達の顔色をうかがっている。やがて、財布を持って指を立てている私の意見を尊重することにしたらしく「ハイライト一箱でよろしいですね」と言った。
　私は黙って頷いた。後からは何も声が聞こえてこない。多分一箱でもせしめたことに満足しているのだろう。
　会計が終わると、男はレジ袋を戦利品のように持ち、先頭に立って店を出て行った。
　外に出ると男は足を早めた。一刻でも酒を飲みたいという気持ちが表れているようだった。彼の頭には、冷たいビールが喉を通っていく光景が繰り返し映し出されているに違いない。
　歩いているうちに日が落ち始め、いくぶん涼しい風が吹き始めた。
　左手に隼人池という名前の池が見えてきた。南角が公園になっている。
　男は少し歩みを遅くすると、池の方を指さして「あそこにしようか」と言った。
　公園の入り口には、緑色をした安っぽい看板が掛かっている。私が学生時代に見た時と、広告の内容は変わっているが、商品名が書かれただけの投げやりな雰囲気は同じだった。
　池のまわりが柵で囲まれて遊歩道になっている。公園に入ると、ちょうど太陽が沈んで行くのが見えた。

公園にベンチが置かれていて、男はそこに座ると、さっそく缶ビールを片手で開けた。横にポテトチップスの袋を置く。
男と私は菓子の袋を間にして座る格好になった。
男はうまそうに喉を鳴らしてビールを飲むと、満足そうに息を吐き出した。
「さて、この間の続きでも話すとするか……」
こうして、男はまた話を始めた。

――そんなわけで、俺たちはあの悪魔のような男に一泡吹かせてやろうと、佐田に連絡をつけて、呼んでもらった。そしていつものように麻雀から始めた、もちろん勝てるわけもなく、一区切りついたところで、こうきりだしたんだ。俺たちの資金も底をついたから、最後の一勝負をしないか――とな。泥門はいいでしょうとばかりにゆっくりと首を縦に振った。
俺は十円玉を取り出して、「このコインを四回続けて表でも裏でも出してみよう、もし出来たら、今まで俺たちから巻き上げたものを返してもらう」と申し出てみたのさ。
ヤツは真剣な表情をしてこう言った。「で、私が勝った場合は何を頂けるのでしょうか？」とね。
「欲しいものがあれば、なんでも持っていけよ、どうせ俺には何も残されていないからな……」
これが俺の返事だった。ヤツは俺とツネの二人を上から下まで、まるで奴隷の品定めをするように見つめてから、両手を擦り合わせながら言った。
「わかりました。何をもらうかは、私が勝ってから決めましょう」
こうして、最後の勝負が始まったのさ。十円玉の同じ面を四回連続で出せば、俺とツネの勝ち。一度でも違う面が上になれば、悪魔のような男、泥門の勝ちというわけだ。
当然だが、表でも裏でもいいように両方を用意した。そして裏側を出すことに決まったわけだ。
最初は簡単さ。もちろん細工してある十円玉だ、当たりまえのように裏が上になった。
次の二回目、これも問題なく、裏が出た。
三回目、少し緊張してきた。十円玉を押える指が震えるんだな。裏が出るとは分かっているのに、出なかったらどうしよう、そんな不安が浮かんでくる。俺は、深呼吸をしてから慎重に弾いたよ。
永遠に回り続けるのでは、と思った頃、十円玉はあたりまえのように裏を上にして倒れた。それを見たときには、思わず溜息が出たものさ。
チラッとあいつを見ると、不思議な事に、十円玉を見ていないんだよ。それどころか一喜一憂している俺たちを、観客のようなまるで他人事のような表情なんだ。もう結果なんてわかっている、こんな事は何度も経験している、というような目付きなんだ。
俺はそれを見て、とんでもない事をやっているのではないか、イカサマ・コインで運命を変えようなんて思ったのは、思い上がりで、もっと大きなものに操られているだけではないか。そんな感情が湧きあがってきた。
そこでどっちにしても、もう後戻り出来ない、それにあと一度コインを回すだけだ、と気力を

奮い立たせてみた。
　俺は、落ち着いて十円玉を弾いた。キイーンという心地よい音がして、回りだした。やがて勢いがなくなり、コインの裏表が識別できるほどゆっくりと回転しながら、倒れこもうとした。
　その時、グラッとビルが揺れた。そのはずみで十円玉はおかしな動きをしながら動きを止めた。
　そして、上になったのは絶対にありえないはずの「日本国」と刻まれた表だったのさ。

　男は、そこで残りのビールを飲み干すと、右手でグシャという鈍い音とともに、ビールの缶を握りつぶした。
「そして、どうなったかと言うと……」
　そう言いながら、男は左手をポケットから出すと、私のほうに突き出した。そして突き出した手に嵌めていた黒い手袋をゆっくりと口を使って、外す。
　その手袋を外した左手は、もう一つ肌色の手袋をしているのかと思うほど、違和感のある色をしている。
　ーー義手だ。その義手の意味が、頭の中にジワジワと染み込んで、ある一つの答えを形作った。
「うわぁー」
　私は、悪魔のような男が賭けの代償に望んだものが、どんなものだったのか分かると同時に、悲鳴を上げた。

　私は公園を飛び出した。
　気がついたときには、地下鉄「いりなか」駅の改札口にいた。
　切符の自販機の横で息を整えた。後を振り返り、男がいないかどうか確認をする。遊びにでも行くのか陽気に話をしている学生の三人連れと、仕事帰りの疲れ切った四十代のサラリーマンがいるだけだった。
　切符を買うために財布を取り出そうとして、胸のポケットが汗でぐっしょりと濡れているのが分かった。財布がワイシャツの汗を吸い込んで重く感じる。
　私はそのまま家に帰ると、すぐに寝た。そして嫌な夢を見た。

終章

　そろそろ夏も終わりにさしかかり、暦は九月に変わっていた。
　今日は土曜日で本来は休日なのだが、担当している工事現場が事務所をたたんで会社に引き上げるので、その手伝いのために出てきていた。
　引っ越しが一段落してから、打ち上げということで、村上さんと下ちゃん、私と山下の四人で、麻雀でもやろうということになった。
　私は例のことがあるので、気がすすまなかった。かといって、三人を見捨てて私だけ不参加と言うだけの勇気は持っていない。
　麻雀をやった人間なら、四人集まるのがどれほど大変な事なのかわかるはずだからだ。
　昼を過ぎた頃から、空には水分をたっぷりと蓄えた鉛色の雲が広がり、午後三時になると大粒の雨が降ってきた。
　あのときも雨だったなと思い出した。
　雀荘にあの男はいなかった。土曜日ということや、まだ昼過ぎだということもあったのかもしれない。
　麻雀の方は、あの男がいつ現れるか、気になって集中出来なかった。ラス・三位と調子が出ない。
「シロちゃん――調子が悪いみたいだな、今日は今までの分もまとめて返してもらうぞ」
　村上さんが点数を記入しながら、うれしそうに言った。
「勝負はゲタをはくまで分からないっていうでしょ、これからですよ」
　私はそう言うと、気合いを入れて山から牌を取り出した。
　最後の半荘で私は大きなトップを取って、わずかなマイナスで終えた。大負けさえしなければいいと思っていたので、ほどよい結果と言えるだろう。
　接待も兼ねているのだが、あまりこちらが負けたりするという露骨な事はうまくない。あくまで真剣な勝負のやりとりというのが、村上さんの好みなのだ。彼には相手が手を抜いているかどうかわかるらしいのだ。遊びでも真面目にやらないとダメだというのが、村上さんの持論である。
　今日みたいに適度に少し負けるというのが、一番都合がよい。機嫌良く帰ってもらえるからだ。
　私以外の人間は、山下が車で送っていくことになった。
　私は三人と入り口で別れると、トイレに行くふりをして店の中に入った。
　例の男の事が気になっていたのだ。
　レジにいる男が店のマスターなのではないかと思った。彼ならどんな人間が出入りしているのか良く知っているだろう。
　あたりを見回して男を捜すと、すぐに見つかった。
　黒いベストに蝶ネクタイをした長身の男がそうだ。近付いてからあの男について聞いてみる。

「すいません。少しおたずねしますが、黒いジャンパーを着た、五六十歳くらいでちょっとハゲた男は来ていませんか……」
　男は不審げに私の顔を見た。さきほどの、客に見せる穏和な表情とは違う厳しい表情だった。
「たまに雑用を手伝ってもらう、ゲンさんというのが、あんたの言っている人に似ているけれど……」
「そのゲンさんという人は、左手にいつも手袋をしていませんか？」
「そういえば、ゲンさんは手袋をしていたかもしれないな、俺はあんまり細かい事は気にしないタチだからね」
　男はそう言うと、私から目を逸らして、伝票を整理し始めた。
　私は黙っていた。
　男は伝票をダブルクリップで閉じてから、手提げ金庫に放り投げると、こう言った。
「ひょっとして、ゲンさんから何か変な話を聞かされたんじゃないのかい。だったらホラ話だから信じちゃダメだよ」
「ホラ話……ってなんですか」
「こっちも困っているんだよ。ゲンさんがおかしな話を客にするんでね。お客さん、本気にしないでくださいよ、ゲンさんの手は、労災目当てに、自分でプレスで潰したんですよ。悪い奴じゃないんですが、そこにあるマンガとか本を読んでから、変なことを言い始めてね」
　蝶ネクタイの男は、そう言うと、棚に詰め込まれた本の方に視線を走らせた。
　私もつられて、本棚のほうに目をやった。あれを読んで、主人公にでもなったような気になったのだろうか。
「冗談だったんですか、あの時は心臓が止まるかと思いましたよ」
　私は、心臓のあたりを、手で押さえながら、冗談めかして言った。あの時の事を思い出すと、上着を通して心臓の踊るような鼓動が手のひらに伝わってくる。
　頬が赤くなるのを感じた。タチの悪い、いたずらに驚かされた事よりも、尻を触られたオールドミスのような悲鳴をあげた自分が恥ずかしかった。
　だが、そんな恥ずかしさとは別の感情が、体の中に残っているような気がした。それは、医者に「どこか痛い所は？」と聞かれて、痛いところがたしかにあるのに、その場所を言葉でうまく説明出来ない、そんなもどかしさのようなものだった。
　ふと思いついた。男の話の中に出てきた「泥門」という名前だ。何かひっかかると思ったら、泥門はデーモンじゃないか。そういえば、佐田も「サタン」に似ている。
　まったくうまく引っ掛けられたものだ。軽く深呼吸をしてから、私はあらためて蝶ネクタイの男を見てみた。
　男は糊のきいた白いワイシャツを着ている。黒いベストやズボンも、先ほどクリーニング屋から取ってきたような折り目がついていた。細身のズボンが良く似合ってスラッとした長身に見せている。
　年は四十代後半だろうか、髪の毛が黒々としているのは、染めているのかもしれない。
　寝る前に、酒を飲みながら、ジグソーパズルを一時間ほどやる、そんなタイプに見えた。

男は顔を上げると、私の方を見た。その表情は――まだ用事があるのか、と言っていた。
それをきっかけに私はその場を離れたが、まだもやもやとしたものが残っていた。
男は私の体をすり抜けると、足を引きずるようにして入り口に向かった。
開いたドアから雨の降る音と湿った空気が入ってくる。
表で看板の照明でも入れたのか、急にガラス戸のあたりが明るくなった。
店に戻ってきた蝶ネクタイの男は、入り口で立ち止まった。水たまりの泥が跳ね上がったのだろうか、ポケットからハンカチを取り出すと、ズボンの裾をまくりあげて、汚れたところを神経質なほど、ていねいに拭いている。
右足の靴下が少しずり落ちていて、ズボンと靴下の間にアメ色をした素足が見えた。
――義足？　そのアメ色の肌はあの男の義手によく似ていた。
男の話に出てきたタッパがあって、首にアザのある、ダンスの上手い、きれいな脚をしていた、ツネという男。
蝶ネクタイの男はゆっくりとした足取りで、私の方に歩いてくる。よく見ると右足の動きがおかしい。
男は、私の前まで来ると、もう帰ってくれ、というように頭を下げた。
その時、シャツの衿の下から覗いた首に、くすんだような紫色のアザがあるのがはっきりと見えた。
「もっと別のものを物色していたんだな。今でもあの目付きを思い出すよ……」
あの男の言葉と同時に、貧相な外見に似合わないほどきれいな手をしていたことを思い出した。
悪魔のような男の捜し求めていたもの――それが何だったのか、私は理解するのと同時に、湧上ってくる悲鳴を押えるために、両手で口を押えた。

了

コインは暗いほうへと傾く

http://p.booklog.jp/book/78514

著者：猫吉
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/nekokiti2001/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/78514

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/78514

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ